
世界は愚かし正せよ祖国!!

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は愚かし正せよ祖国！－－

【著者】

Z6391K

【あらすじ】 じりめのぐるね

黒髪の乙男（お菊さま）と彼女（彼？）に想いを寄せる一途な先輩一さんが各国のくせ者めらと夜の酒通りで繰り広げるへんてこファンタジー

プロローグ（前書き）

ヘタリア×夜は短し歩けよ乙女のまさかすれぬペロトイ

書き上げられるかは不安ですがほひまちがんばりたいと想っています。
うわ～前途多難！！

それでは凹じ上がり

プロローグ

これは非常に遺憾ながら俺の話ではなくあいつの話であることを最初に語らなくてちゃいけない

世界の指導権を握り、他の国より自立と云ふと名団が小狡く遁走するなかでまたく意図しなこうとにあつまつこの世界のヒロインだつた

そのじとあいつは気づかなかつた

あいつと今でも気づいていまい

これはあいつが夜の旅路を、
なんというか持ち前の天然さと真面目さと……か、可愛さと（小声）
こほん、えーっとまあその他いろいろを駆使して歩き抜いた記録で
あり、悔しいことに主役になれなかつた俺の記録でもある

諸君には肩の力を抜いてこの一人の茶葉を入れすぎたアールグレイ
の味に似た人生の珍味……（苦いだなあ、おい）を心ゆくまで味わ
つてくれ

願わくばあいつ、や、やつぱ俺にも声援を。

マルノイチ

「おともだちキッス」を皆わんぱく存知でしょうか
あ、いいえ！勘違いしないでほしいのですがこれは私が考案した
のではありませんよ？

例えば身近な国の破廉恥窮まりない行動に腹が立ち、やむおえず鉄
拳をお見舞いしなければならない時ってありますよね

え？ない？ふうむ。文化の違いでしょうか。私はショッキングですよ
しかし、そんな時に殴るなんていけません

なんてつたつて目だつてしまいしますし、国際間の関係が崩れ恐ろし
いものとなってしまうかもしれません

しかしここでいつたんその「ぶしを下ろし深呼吸をして怒りを心の
奥に押し込め、相手の国の耳にせ、接吻をするのです

「鉄拳を堪えて、悔しさに顔を歪めつつも耳元にキスをする、う
ん、やっぱお兄さんは恋のキューピッドの生まれ変わりだなあ」

幼いころ、私に、歳のはなれた兄の愛の戦士（個人的には美少女戦
士じゃないのが大変残念である）が伝授したこの技

愛の戦士…このさこばらてしまえばフランスさんなのですが秘密
ですよ？は次のように語りました

「こーかい。島国であつ、あゅーと極まりない菊はのべつまくなしに他の国にねらわれるけど、鉄拳なんてノーノーハ。美しくない。腐れ外道やどあほ達をあしらひときこなお兄さんの教えた『おともだちキッス』を使つんだ。おともだちキッスには、『あなたはあくまでお友達でいたいの』といつ日本的な控えめな拒絶の意味があるから。おともだちキッスを駆使して国々をあしらつてこや、美しく世界を渡り歩けるんだよ」

愛の…フランス兄さんはやうこつてワインクしました

私は理解しかねましたが、フランス兄さんがあまりにも使え使えとしつこく言ひ寄つてくるので少し頭にきました

はつ、もじやーいじやおともだちキッスを使えばこいのでしうつか

…勇気がいりますが、これで効かなかつたらそれを理由に「ほら効かないじやないですか」といえばいいのです…！

「フランス兄さんつ」

「ん?なんだこやつとわかつて…」

ちゅつ

私は思い切り背伸びしてフランス兄さんの耳たぶに軽く接吻をしました

「ふ、フランス兄さんば、あくまで、お、お友達ですよーー。」

フランス兄さんはよとことこから口をぱくぱくとやか、少し頬を上氣しています

私はフランス兄さんが静かになつたのを見て、これは意外と効果があるのかなと見直した

フランス兄さんは頭をかいて両手をあげ、「まいりました」と言った
小さな声でフランス兄さんが「こりや、えらい必殺技伝授しちゃつ
たかもなあ」と言つたのは上機嫌な私には聞こえていなかつた
私はこうした訳故に、おともだちキッスという奥の手をもつ。

マルノ二（前書き）

今更ですが今までの登場人物の名前を一応。

先輩 アーサーさん

黒髪の乙女 菊さま

赤川先輩 スイスさん

東堂奈緒子 リヒテン

東堂さん にーに

乙女のおねえさま フランス兄ちゃん

これから登場予定

羽貫さん エリザ姉様

樋口さん プロイセン

李白 イヴァン

その他配役は気分次第です（笑）

お邪魔しました。

では続きを召し上がれ

マルノニ

近隣の国であるスイス先輩が結婚することになり祝賀会が催された
俺は特にスイス先輩と親しいわけじゃなかつたけど上司が行けとつ
るさじから顔をだした

そこにはあいつの姿もあつた

黒髪の乙男、菊の姿が。

会場は川辺にあり、落ち着いた雰囲気を彩るつす橙色の色彩の雪洞
が温かく、暖かく…

あつちーなあちきしょーーー！

契りを交わしたばかりの新郎新婦（そつそつ。新婦はリヒテンシュ
タインさんといつそうだ）は神を畏れぬ熱々つぶりで参加者を丸焦
げにしていた

「こいさま、わたくしなんかと結婚されてほんとによかつたのどう
ぞこまますか？」

良くきや結婚してねーだろ

「なにをいつているのだ？我輩には他の女など視界にすりはじるこ
たらん、リヒテン、お前さえいればな」

あほりし。眼鏡買ったほうがいいぞ？

「」「これも」「コレト」

「ああにこれもつーーー。」

「おおリヒトンーーー」

それをお姫様抱つこいでぐるべると廻つながりやつこ

おつ、だれか俺をみる

今なら笑顔で青筋を浮かべられそうだが

けつ、こちやつときやがつてとここの場にふわわしくないとしつながら舌打ちをする。

もうこーい。

俺には楽しみがあるからな

テーブルの隅のあいつの姿を眺める

あいつはさつきから何が楽しいのかよくわからんが皿の隅にある蝸牛のからを興味津々といった様子で眺めている

みてるこいつは、まあ楽しいからいこんだナゾなつ

あいつはクラブの後輩で、はづかしながら一皿惚れつづーんだよな…をしてしまった

でも親しく話したことではなくて今日はチャンスだとおもつていたのに。

幹事「みんな、席順は連絡してあつたと思つけど、幹事なオレが全部今日決めたからそれに従つてくれよ」

はあ？

俺はせつかくあいつの一つ離れた隣という超特等席（せ、最初から隣とかは…ちょっとむりだし！）だったのに

余計なことしゃがつて！と再び腹が立つて質のよいローストチキンをかじりながら幹事を睨む

幹事は当たり前のようであいつの席の隣に座り

あひうことが俺を見てニヤリと笑つた

だあ～ちちくしょ
いまにみてろ幹事アメリカい

立ち上がりうとした瞬間

「それでは新郎新婦のご挨拶だぞ！みんな席に着いて。しそ、か、に、聞くんだぞつ。いいね、特にアーサーくん

会場からの失笑がもれ俺はなすすべなく席に座り直す

ちくしょーちくしょーちくしょー

どんな仕返しをしてやひつかと考えながらも俺はローストチキンをかじるしかなかつた

マルノサン

料理店での祝賀会がお開きになり、参加者が散り散りに路上にあふれた

俺は血眼になつてあいつの姿を探した

遠くから子供（シーキ君）と母親のマシコーちゃん

「まあ、あの人なんですか。変態ですよ」

「あわわ、しー、そんなこといつちや怒られちやうよ」
という微笑ましすぎる会話に頬がぴくぴく引き攣るが、ええい、そ
んなの無視無視

散々人に蹴飛ばされたがやつとみつけた

しかしあいつは幹事アメリカに馬鹿丁寧に頭を下げていのりだった

「えー、君はもう帰つちやうのかいつ！？」

「はい、すいません。新郎新婦に祝福の意をお伝えください」

「君がいない会になんの意味があるつていうんだ」

あほ幹事、おめーは幹事なんだから一次会も仕切るに決まつてんだろ

「あんな熱烈カップル、正直めんべくさいんだぞ」

いやいや、苦い顔をするなよ

おめーは幹事だろ（一回目）

あいつだってそんな事言われたって迷惑で…

つて、笑ってるし

ちくしょー

俺は歯ぎしりが止まらない。

幹事は彼女の様子をみて調子にのつたらしく

「ねえ、オレと一緒に飲も」

そつこつてあぬひことかあいつの肩をだき、頬にキスしようと
いぬつ、はあつ？

あいつの絶体絶命のピンチ！

俺は溜まらず飛び出して幹事に体当たりを食らわせようと

食らわせうと

ジャキッ

「破廉恥です」

あこつはおつきな花の髪飾りを幹事の首元に当てる

それはピコンの部分がケースを外すと鋭利な小刀になっていたようだ

なんだ…俺いらねーじゃん…

こぼれ落ちそうになる涙を拭い、あいつがいつに殴りこしてしまったことに焦る

俺は出でてきた手前引き返す」ともできます

「や、偶然だな。」こつは俺が面倒みるから安心しin…じゃ、じやあなつ」

そもそもあほ幹事を引っ張つて逃げてしまつた

幹事は涙ぐみ鼻水がでている

「アーサー、菊の目え見た? 本気だつたつてあれ」「…」、台本にないことしゃべるなよ」「だつて」

路地裏に隠れてあいつを見ると優雅な動作で髪飾りを着け直し、何もなかつたかのように歩きだす

「つそりと追つ

「アーサー」

「つやつと」「ねえ、待つてくれよ」…と、つむか

「つこいくさんよ」

お前の出番は終わつた、と小声で怒鳴るがあほ幹事は聞きもしない

「オレ、惚れたわ。黒髪の乙男に」

「はあ……？ あいつは俺が」

「君つむれこよ。見失つちゃつたじゃないか」

見回すとあいつの姿はもつなかつた

掴みかけた好機は瞬く間に霧散した

「あ、アメリカアああ……てめえよくも……」

俺の罵声だけが路上に虚しく響いた

かくして俺は……

「おいおい、ヒーローなオレを忘れてるなんてひどいんだぞつ」

……お・れ・た・ちは早々と表舞台から退場し、あいつは夜の旅路を
辿りはじめる

ここからはあいつに語つてしまひしかないようだ
たのんだぞ、菊

マルノモン

「これは私が夜の酒場街を歩いた一晩限りのお話です

そもそもの始まりはスイスさんとリヒテンさんの「結婚の祝賀会にて余りのお一方の熱々っぷりに胸を焦がしなにげなく皿の隅に転がった蝸牛の殻をみていたら

急に「」からか声が聞こえてきました

「菊、おい愛しい菊」

私は辺りを見回しました

私の周りは知らない方ばかりでしたし、先程知り合った幹事さんは、偶然一緒になつた私のクラブの先輩となにやら楽しげにつかみ合つています

「どうりでねですか」

「うううううううう

小声で尋ねるとあわい「」とか蝸牛から声がある...「」がする

ま、まさかあ

「うううううう」

はしたなことは思いつつ指で拾い上げ、耳に近付けると

「俺だよ

…「フランス兄さんだよ」

「ばかですかあなたは…」

はつ、しまつた

口にでてしましました、こほん

申し訳ない気持ちで、無言になつた蝸牛の殻にすいませんといひながら、

とすると

「…菊がばかつて言つたの初めてかも、新鮮…」

忘れてました

フランス兄さんは生糀のドミでした。謝りつつとして損しました

「フランス兄さん、何故蝸牛からお声がするのですか」

「ふふ。お兄さんはね、菊の自慢の兄貴であり、愛の戦士であり、
そして極めつけに

…「蝸牛の精霊なんだよ」

えーと、しゃべと流していくのじょつか。微妙なラインです

…フランスお兄さんと、誰よつ自分のためにワンースの蝸牛型の
電話機を使って会話していくと思ふことにしました

「とにかくお兄さんとお菊に会いたい事があつたんだよ」

「なんでしょ?」

「お酒のみたいよね」

「え?」

「お酒飲みたこんでしょ」

「こや、今日は早く帰つて溜まつてこる深夜アニメの録画を覗よつ
かと……」

「お酒飲んで」なきや、お兄さん菊のバーとかバーを初恋のバー
——れんざ話しあつよ

「お酒のみた——.」

「よし、近くに円面歩行つてこのバーがあるから、やうがこことお
わづてかそこに行つてくわ。だなことバー……」

「だあああつ——.」

私は動転し、つづかり蝸牛の殻を落としてしまって、つづかり踏んで
しまつました

『やああああと悲鳴が聞け、そのあと、でもうひとつ気持ちいかも
ーとも聞けました

「あらこやすわー、つこいつかりー。いやいやほんと

そしてうっかり悲鳴が聞こえなくなるまで何度も粉々になる程踏み
潰し続けてしまいました

…私つたらうっかりささつ

そして晴れやかな気持ちで一次会を幹事さんにて辞退する話を伝え
足歩行ロボットめいたステップを踏みながら両面歩行なるお店に向
かいます

マルノゴ

私は太平洋の海水が三ツ矢サイダーであればよいと思つべからに三ツ矢サイダーを愛しております

え? コーラはダメかつて?

勿論。コーラなど邪道!! あんなものは黒い砂糖水です
ぼーいですよ、ぼーい。

三ツ矢サイダーのあの嘘偽りのない透明さにあなたはなぜ惹かれな
いというのです

ごほん、失礼。

もちろん三ツ矢サイダーを瓶のまま朝の牛乳を飲むように腰に手を
あてて飲み干してもよいのですが…あの。無理なのです

何度も挑戦してはいるのですが半分までくると胃が『ちょ、おま、
ギブギブ!!』『老体なんだから胃を大切にしようぜ、な!!』と白
旗をふつてしまふのです

ですので未熟者な私にはそのようなたいそれた夢は心の宝石箱にしま
つて置くことが慎みといつものとしています

そのかわりに私は力クテル（もつ、フランス兄さんつたらなんでバ
ーを指定したのでしょうか）を嗜もう…としましたが

「マスター…お水をもう一杯」

「お姉さん、ついまお水屋さんじゃないんだぜ」

「かたじけない」

私は顔を真っ赤にして俯いた

フランス兄さん、話がちがいますよ！－

フランス兄さんの話ではこのバーは一杯のカクテルが300円と書いていたじゃないか

ちらり、と値段表を見ると

『カクテル1500円～』

無理無理無理！！

先週DVDの限定BOXを買いあさってしまった今のお財布では…

かくして私は月面歩行にて無手勝流にお水を嗜んでいた（やけ水とでも呼びたい気分です）のですが、カウンターの傍にいた見知らぬ殿方に不意に声をかけられました

「ねえ君、なにか悩み事があるんじゃないか？ そうアルね。」

その方は完全にやつちやつてました。お酒の飲み過ぎで目がモヤモヤらしています

恐すぎです

「悩みがあるなら我に言いてみい、われい」

どこのヤクザですかー

うまくもない洒落を堂々といえる方にある意味で感服しました

その方は中国さんといいました

彼は大変酔つており、でへへと笑いながら近寄つてきましたが、中国さんからはつせられる香りは…酒くつさあ

この奥深いといえなくもない匂いは大人の香りなのでしょうか

大人の階段を上るのが嫌になつた瞬間でした

「なにか奢つてやるアル」

「お願ひします」

「…そこは男たるもの一回くらい断るものじゃないアルか」

「資本主義社会においてタダより安いものはありませんから

カクテルを飲む私を中国さんは興味津々といった面持ちで見つめていました

「菊、似合いすぎアル、その格好。嫁にしたいアル」

しかも真顔で。

私は椅子からずり落ちた

「つーー酔いすみですよ中国さんーー日本通りにお願いします」（
小声）

心配することねーアルとからからと笑う中国さん。
心配の塊ですよあなたは

「そつそつ、菊、一人アル？連れとかいねーアルか」
「は、はい。一人です」

と私は汗を拭きながらいました

マルノロク（前書き）

またまたお邪魔します

えーっと初めて読む方へ

私もそこまで深くはわからないのですが一応解説を

シナティ

日本のキティの海賊版

目、鼻、そしてなぜか口をもつ

ちなみに原作の夜乙では錦鯉ですがヘタリア番といふことで

では、お邪魔しました
続きを呑じ上がれ

マルノロク

中国さんはシナティを育てて売る仕事をしていなやうです

「ん、育てて？」

「中国では一つ一つ丁寧な手作業で育成アル。出稼ぎのおばちゃん達が汗水たらして…」

「あの、いいですも」

リアルなんで。

「昔は札束で汗を拭けるほど儲かつたアル」

中国さんは遠い田をした

「しかし、今思えば馬鹿馬鹿しいアル

憎々しげにカウンターを拳で叩く中国さんの背中は少し小さく見えました

とある街に千金を投じて彼が作り上げた『中国シナティ制作所（株）』があります

そこで中国さんはおばちゃんたちと手に手をとり著しい成長を遂げていったのですが今年になつて続け様に厄介事に見舞われました

ネット上で大掛かりな『パクリだろ、あれ』というガセネタ（本人

（談）がながれるわ

おばちゃんの一人が『コンナセイカツトハオサラバヨー』といつて工事資金を持ち去つて行方をくらませるわ

シナティの中経費削減のために綿でなく「つもる」しのヒゲを使用していたのがばれ（ちょ、本気でしょーもないですねつーー）返品の嵐になるわ

「えーっと、災難なんでしょうけど何故そんなにコメティー……」

「人の不幸を笑うなアル！！」

「恐れ入ります……ふつ」

「せせら笑うなアル！！」

手足をばたつかせている様子は微笑ましそう感じる

「それで終わりじゃないアル。これ以上は何もないと思つていたらあれアルよ。あれにはさすがの我も思わず笑つたアル」

先日の夕刻、その街に竜巻が発生したそうです

その竜巻は勢力が衰えることもなく、あるじことかまつすぐシナティ制作所へと入つていくではありませんか

パニックで『ホンモノノキテ ノロイイダー！』と叫ぶおばちゃんの群れに踏まれながらも中国さんは竜巻に立ち向かつていきました

西側からの強烈な夕日が辺りを照らすなか、中国さんの最愛のシャーティ達が二ヒルな微笑みをうかべながら立派なキティになつて帰つてくるよーとでも言つかのよつて夕空へ飛びたつていきました

「孫・シナティを返すアル！！」

「王・シナティを返すアル！！」

と一つ一つの名前をさけんだ（今まで、いくつあるんですかそれ）のですが竜巻は可愛…もとい二ヒルなシナティ達を残らず吸い上げてしまつたのです

「いやーなんかもう…」愁傷です…ふふつ

「可哀相なものを見る田でみんなアルー！！」

その厄災のために中国さんは借金を返すみこみが無くなり、次なる一手を暗中模索だそうです

「孫・シナティを返すアル。王・シナティを返すアル。…いや返さなくて良いから現金で返せアル」

「中国さんは自分に正直ですね」

私としては若干皮肉だったのですが中国さんはプラスの面でとつてくれたようです

「うう。優しい言葉をかけてくれるのはお前だけアル。4000年も生きてると審美眼はおのずから鍛え上げられるものアル。お前のような嫁をもてた我は幸せものアル」

いやまでまでいつ嫁になつたのですかっ！！

「私たちの幸せな未来に乾杯」

「…はあ。」

タダ酒を飲まして頂いている身、これぐらい我慢です

「それにしてもよく飲むアルな。そんなペースで大丈夫アルか？」

「ええ。お残しは許しまくんでえ、といつ日本の美意識がそうさせ
るのです」

「わけわからんアル」

中国さん苦笑いをしてから、すつと真面目な顔つきになつた

「なら好都合。もつと美味しい酒を飲める店を教えるアル」

お酒が入つて熱い手で私の手を引いて立ち上がらせました

「ちょっと店を変えるアル」

マルノナナ

私達は川沿いを一人で北へ向かっていました

中国さんは大きなカゴを背中にしようつていらっしゃいましたが中身を聞いても「気になるアルか、気になるアルか」とやたらにやにやと笑つてゐるので、むつとして「いこですつ」と断つてしまつた

辺りを眺めながら中国さんは秘密のお酒についての話をしてくれました

そのお酒は『ぼじょれぬなんぼ』といいます

…名付け親でござい。

中国さんはほろ酔いで少しそたよたとしながら話してくれました

「そもそもぼじょれぬなんぼといつのは中国の密林の奥深くで作られてゐる密酒アル」

「えーっと、それはボジョレーヌーボとは」「違うアル。もしくはあっちが偽物ね」

ぐるぐるーと犬歯をむきだして反抗する彼に少し身を引く

「わかりました。それでぼじょれぬなんぼは、ビのよつなお酒なのですか」

「よべぞ聞いてくれたアル。密林の奥深くで少林寺の最高僧だけが

製造方法を伝授されていくもので、とても手に入れるのが難しい神
秘の酒アル

「ほひそれはそれは。」

私はほてつた顔を川からの風で冷やしながらぼんやりとぼじょれぬ
ぬんぼについて思いを巡らせる

密林・少林寺・

しかしこのまにか
大量生産・シナティ・うーん、
すいません、臭さふんふんです

そんなお酒がこんな酒場にあるものなのでしょうか、なにより胡散
臭い。うむむ

「飲んでみたいものです」

偽造品を密輸入してる疑いもありますしねつ (パロ中であつても
許しませんよ、中国さん!)

中国さんは足元の小石をアチョッとしてながら蹴飛ばして、ふと氣
づいたように振り返りました

「お前、イヴァンを知っているアルか?」

「イヴァンさん…ですか。存じませんね。」

中国さんは顔に多量の縦縞をこしらえて自分の肩を抱いて震えました

「あいつは恐ろしい奴アル」

なんでもイヴァンさんはこの辺では有名な人物で、底抜けにウォツカを愛し、専用の送迎車を乗り回すオカネモチであるそうです

イヴァンさんは最近中国さんが借金を工面して頂く際に奨めたぼじょれぬぬんぼを大変気に入り、気に入つたあまりに知り合う人々全員にそれを振る舞い大いに語らつてているそうです

「聞いた限りでは好い人なイメージですが」

「騙されちゃいけないアル。奴の恐ろしいことといったら言葉にできないほどある」

「そ、そうなのですか」

中国さんは目に涙を浮かべて騙されちゃダメアル、騙されちゃダメアルと私の肩をがくがくとゆらして…目をくわつと見開くと道路の隅に駆けていった

?

私がとてとてと近づいてみると

おうええええつ

嘔吐していた

私は背中をさすりながらこの人は人選ミスだと核心しました

マルノハチ

中国さんが連れて行つてくれたのはがらくただらけの雑居ビルの最上階でした

扉をあける瞬間、私はこのまま拉致られてしまつたらビリシヨウヒ本氣で考へてしまつぽどに陰氣な空氣あふれていました

中は拾つてきたよつな薄汚れた椅子やソファが乱雜に配置してあります

お密はめいめい好き勝手に自分の居場所をさがして腰をおろしています

「菊、ヒツジアル」

私は中国さんに勧められて焼酎を飲みました

「我たちの永遠の幸せに乾杯」

「もう勝手にしてください……」

それは照れアルね！！

中国さんはぼしほじと背中を叩いてきます

私はタダ酒タダ酒タダ酒…と謙虚の様に呟き、天災がすがるのを待つことにきました

30分後

「… でな、娘がひどいアル

先程から中国さんがが愚痴つっているのは娘さんのお話です

離婚していらっしゃったく会つていないそうです。

なんと悲しい話でしょうか！！

「ええ、でもさつと娘さんも心の中ではあなたに会いたいとおもつていますとも」

「せうだといういアルが」

中国さんは拳こぶしでぐこつと田畠たばたを拭ぬぐいます

「我はな、いつも思つているアル

「なにをですか」

「娘の幸せについて」

私は顔おもてをあげました

中国さんは茶化さわすでもなく私をみて悲しそうに笑いました

「娘が幸せになれるなら、我はどんなことでもするアル」

あれ？

私は頬にを滑るなにかに気づき手をあてぬ

濡れた指先、泣いてる…？

俯いて中国さんから顔を背ける

頭がお酒のせいでおわほわとしているからなのです

これは断じて、か、感動した…とかじや。

「菊？」

ほたほたと。

涙が一ツ膝におち、

「ああ、眠いですね…ほら、あぐびばつかりでちやつて、あは、あははは」

「そ、そうアルかっ！なんだびつくりさせんなアル

あはははははは、と他の客人達が半径2mにいなくたつたところで一人は盛大にため息をついた

中国さんは『気づかない振りをしてくれる方針のようだ

かたじけない、と残った涙のあとを拭きながら念じた

「中国さんはどうしての幸せつなんですか」

ふと思いついたままに質問してみた。

「それはもちろん菊といつし」

「それ以外で」

つれない奴アルーと唇を尖らせ。それから一変しにこいつと笑って、焼酎に口をつけた

「いいから違うのこしてるとか、いろんな奴らに出来つアル。やたらハンバーガーが好きな奴、パスタが頭につまつてそうな脳天気な奴、起源がどつとかうるさい奴もいたかな…みんな変な奴ばっかりアル」

口汚くいうわりに中国さんはとっても楽しそうです

私もなんだかそういう風に出来るのはいいな、と思いました

「4000年生きたアル。辛かった時もあつたし、ひもじいことも数え上げたらキリがないほど。本当に長い年月だつたアル。でも、ここで今奴らとであつて騒げるのは」

中国さんは私をまつすぐこみてはにかんだよつこ

「悪くねえ気分アル」

と言つた

「私もそつ思つていますよ」

自然と微笑みがこぼれた

中国さんは眩しそうに私を見て頭を撫でてくれました

それからおもむろにしょつていた力「から手の平サイズの金属を取り出し、私の手に握らせました

「君にお守りをあげるアル」

そつと開くとそれは先端が凹凸になつて、持ち手が平たく丸っぽい
… まつまるとこ

「鍵、ですか」

「我家の鍵アル。寂しい夜にはいつでも我的胸で泣きに来ていい
ネ」

「帰れ…！」

私が真っ赤になつて鍵を中国さんの顔面に投げつけたのは言つまでもないことです

マルノキュウ

「シナティはいまに本家を抜いて世界中の人気者になるに決まっているある。そもそもシナティの起源は古く…」

中国さんはシナティの起源について語る合間に私の手をとり、「いい手アル」「可愛い手アル」と撫でます

私の手などどこが可愛いのでしょうか。ただ他の方に比べると小さくて色が白いだけで。

私のよりゴム手袋を撫でていたほつが断然艶やかで愛おしいに決まっています

「ああ、酔ったアル。菊もえらく飲んでるアルね」

「大丈夫ですか（…そんなんじゃ明日からハローワークに取り合つていただけませんよ！…）」

私の心中の黒発言に気付かない中国さんは子供のように面託なく笑つた

「楽しく笑つて飲む酒は一日酔いにはならないアル。いま私は幸せアル」

そういうつて中国さんは腕を私の身体に回して抱きました

「元気だせ、若者よ！…」
「はい、私は元気ですよ」

- - - [中国さんのターン] - - -

… 中国さんはにやけた

(きたきたきたーアル！！)

うししししと酔いも手伝い正直お友達になりたくない笑い方である
が喜びの絶頂にいる彼は気付かない

なぜなら…

(ついに菊にぼでーたつちのシーンアル！！)

説明しよう!! 台本ではこのあと菊のドレスにつっかり手が入つてしまいつつかり胸を触つてしまつという中国さんにとって、待ちに待つたおいしいシーンなのである、説明終わり。

(菊も顔が真っ赤アルー！！意識してるのがバレバレ。可愛いすぎるアル！！うしし)

中国さんは变态…もとい、役に成り切ろうと舌なめずりをした

- - - - - [菊のターン] - - - - -

あのシーンですか…

私はとても冷や汗をかいていた

劇中とはいえ、と、殿方に胸を触りせらるなど破廉恥です

「 」は絶えなければ…うーでもでもでもでもーーーーー

「菊、いくアルよ」

中國ちゃんが小声で合図する

……てかなんでそんなに嬉しそうなんですか貴方は……！

私は頭から多量の湯気が出てる」とを知りながらも

小さく「はい」と答えた

ぺたぺた

「日本、オマエ胸なーんにもないんだぜー」

啞然

「かあ……かんじくわいわい……」

「え？ オレなんか悪い」としましたかアーキ……」

「ぐはあ

「え、ヒザベータさん…？」

… いろんな事が起こりすぎましたが一応説明してみます。

えーと、中国さんが私のむ、胸を触ろうとした瞬間、韓国さんがどこからか現れ胸をぺたぺたし、呆気に取られた私をよそに中国さんがキレかけ、さらに中国さんの10倍ぐらい憤慨したエリザベータさんがフライパンで韓国さんを殴った…といったところでしょうか。

なぜエリザベータさんが怒ったのかは私にはわかりませんが

いいシーンが!! 菊の色気が台なし!! と言しながらエリザベータさんは韓国さんをタロ殴りです

死んじゃいます、鉄のフライパンは死んじゃいますって

「韓国め、そんなに乳が揉みたいなら私の乳を揉め！」

「帰れえ！！」

韓国はわーんと泣きながら酒場から逃走した。

「まのま… もつ（笑）

中国さんは我に返つたよつに「今のまニアル… もつ 一度やられ
るアル」

「うひーと私をみて懇願する中国さん。私は優しく笑つて
「えーと、まあ結果だけみれば同じなので、これでいいんじゃな
ですか」

中国さんを見捨てた

「菊うー…」

「そ、中国さん！」で退場ですよ

中国さんさふうつと立ち上がり

「う… けくしょおおおおアル」

そして去つてこく中国さん。

少し可哀想だつたじょつか

私がため息をつくとヒリザベータさんが私の傍らに腰掛けました

ヒリザベータさんの顔がずすい、ヒップになつた。

「大丈夫？」

凛々しくも清楚な花のよつでま」と麗しい女性であり。

「ち、近いですエリザベータさん」

私は小声で牽制する
顔が熱い、やつぱり他の国のみなさんの距離感は苦手です

一
きわ
い

エリザベータさんは奇声をあげて私に顎刷りしました

私は汗りました

この人、百八十劇中なこと忘れてるでしょ。

「ちゅうとギルー！！あんたもこゝちおいでよ」

エリザベータさんが背後を振り返ると色褪せた浴衣を着た男が悠然と立ち上りました

「俺様、忘れられたかと思つたぞ」

「ぎくー。忘れてなんかいないつてばー」

「今口で『ぎぐー』つていつただろーー?エリザあーー.」

きやはははとなにがツボに入つたのか、エリザベータさんは大笑いする

少しお酒が入っていますね、全く誰が飲ませたのでしょうか？！

「よひ」

浴衣姿の男 ギルベルトさんが今更感バリバリな挨拶をなさいました

「夜の街であつた胡散臭い人間には、決して油断すんじゃねーぞ。ゆつまでもなくエリザはスキを見せるとな……！」

かつくん

「おわひ」

「隙ありじやー」

きやはははとエリザベータさん再び一人で大爆笑

膝かつくんを見事にきめられ膝をつけたギルベルトさんは苦々しく親指を後ろに向け「こつなる」と言つた

こつして私はエリザベータさんと樋口さん（一人ともキャラが濃すぎ～）というお二方と知り合つた。

マルノジュウ

エリザベータさんは湯水の「J」と「ビールを飲みました

「エリザベータさん、ちょっと飲み過ぎですよーー。台詞覚えてるんでしちゃうね」

急に真顔になつたエリザベータさんは私の肩をがしつとつかんで真剣な面持ちで言葉を発した

「むべるひー」

「ーー?」

「ふみみー」

「…」

「はつぱーい」

異界語を嗜みだしたエリザベータさん。もつ無敵。

けたけたと笑いながら私のドレスの上から太ももを連打しています

私は宇宙人の処理に困つてギルベルトさんに田線を当てる

わざわざ

は、歯をしつしてゐる

怖つ

完璧に嫉妬ですかね

ギルベルトさんはエリザベータさんが大好きなよつですから
田が据わつてます

「わざわざギルベルトさんはなんのお仕事をなされてるんですか」

私は田を逸らせなくなつて頬を引き攣りせながら聞話

「俺様は英雄…」
「ばつかじやーん」

エリザベータさんがギルベルトさんの英雄自慢を根本から…いえ、
地球の表面から剥がす勢いで否定しました

「だつてギルギルつたらー。うひひ。ちつことき泣き虫だつたし
ー」

「ばつ、それは昔の話だろ…おめーこそ男みてーな格好だつた癖
によお」

「いやん。私は永遠純度ひやくぱーせんとな少女よう」

嘘くわ…と呟いたのはギルギル…もと、ギルベルトさん。

ギルギル…知られざる未知な過去になにがあったのでしょうか

「それより菊一」

「なんですか。」

「私達がいてよかつたわね。中国はるくな奴ぢやないんだからね」

そういうて私の膝に頭を載せたままとろんとした目で口をとがらし
恩を押し売りしてきました

場違いなので発言は自重しますが、今現在のエリザベータさん、大
変かわいいです

「はい。でも申し訳ない気持ちもします」

「なんれー？」

精神年齢が一桁になってしまったエリザベータさん

こうこうら膝上から私の耳たぶを引っ張るのをやめなさい
かわいいから…！

あとギルベルトさん、カウンター席からビールをストロー（極細）
で啜りながら私を無言で凝視するのをやめてください
…むせてるし（笑）

でもそんなに椅子を傾けたら

あつ

じれわわ

「あつだあー」

「ぱつかでーギルギル」

…不憫キャラ絶好調。

私はあまりの不憫さに平常心を取り戻すのであつた

「中国さんは商売で失敗してしまったそうです…それなのに私とき
たら冷たい仕打ちをしてしまいました」

エリザベータさんは顎に手を当てる（定位置化しての膝上で）
ギルベルトさんは起き上がりざまに真顔で

「「胸触られたかったの？」」

ハモつた

しょーもない所で、もうーー！

「違いますよつ」

「「またまたあー」」

だからなんでハモつてるんですか。いらっしゃますね

「あー。中国の奴、感極まつて身投げでもしたなあや こいこい！」

「そんなこと…そんなことしないもん。多分」

エリザベータさんせぬらつと立ち上がった

ギルベルトさんの浴衣の襟をしめあげる

「なんでそんな嫌な」とやーのよひ

「いや、なんとなくそう思つただけだ…」「わたしにこじわぬかる
なあーーー！」

エリザベータさんは匕首からかあのフライパン（韓国くんの頭の形
がくつきりだせつ）を取り出し、ばかーとギルベルトさんをなぐ
りつけた

ギルベルトさんは皿をむいて地面でぴくぴくしている

合掌。

私は不憫を通りこした存在に、不用意な発言は控えよといつありが
たい教訓を得ました

「菊一。ギルなんかほつと！」。一緒に次のお店にいかない？」

私は拒否権はなかった

「…お供させて頂きます」

「ちよっとまって」

足首をがしつと捕まれた

「ギルベルトさん、」」無事でしたか」

「……か菊。エリザに逆らってはいけない。彼女の命令は死んでも従うんだ、いいな」

「忠犬根性ですね、ギルベルトさん……感動いたしました。ですが……」

私はギルベルトさんの頭をヒールのかかとで抑えた

「ドレスの下を覗く」とをなによつて、たつて、ね？」

「ギルベルト……」

「エリザベータさん？ なんでギルベルトさんと同じアクションをしているのですか」

私は青筋をエリザベータさんにも向ける。カメラを構えてる……彼女のまつが悪質みたいだ

「エリザ……おめーも菊のパンチラ狙いか」

「ふん、あんたと一緒にしないでよ」

そつこいつとエリザベータさんは起き上がるとつかつかと私の元にすくと立った

私は防護線を張る

「Hリザベータさんは盗撮なんてしませんよね。」

「当然よ。」

ぱつ

正々堂々とめくられた

「……なあつー? ?」

「…せーふぱんつの三回折り、膝上20?と見た! !」

「ふはつ」

鼻血をふくギルベルトさん

「え、Hリザベータわああん」

Hリザベータさんは颯爽と髪を払い「なあに?」と無邪気に笑ったのであった

マルノジュウイチ（前書き）

お久しぶりです
随分と間を開けてしまい申し訳ありませんでした

今回はエリギルがきます
エリザは完璧な変態キャラになっていますが可愛がつてあげてくださいな（笑）

では召し上がり

マルノジュウイチ

ビルの非常階段をエリザベータさんとギルベルトさんとともにビルの非常階段をエリザベータさんとギルベルトさんとともに初夏の風が私の鼻先を通り過ぎました

眼下にある小さな町並みはミーチュアに世界を凝縮したように雑然として、それでも言葉にできない秩序を保っていました

「そういえばなんで非常階段から出るんです?」

「つふふ。じつちのが秘密っぽくていいじゃないの」

ハイテンションで言い放ったわりに田舎を合わせようとしてしないエリザベータさん

「エリザベ、声がでかいぜ……静かに」

ギルベルトさんは慌てた様子でエリザベータさんの口をふさいでしきりに後ろを振り返っています

もしかして、もしかしますかね

「ギルベルトさん、もしかしてこれは食い逃「だ―――あ、あれは、なんだろなー」

すごい勢いで階段を駆け降りた

えーっと、道徳的にいかがなものでしょうか……

私は遠い田で輝く星々を見上げ、”迷うこと勿れ”とこのお告げを
聞いた（ことにした）
うんっ、私、もう迷わない

「きくくー早くしなさいよ。早くしないと下からハーパン覗くわよ」
先に駐輪場にたどり着いていたエリザベータさんが100万ドルの
笑顔で変態発言をしました

「もう、エリザベータさんのはしたないですよ」

私はドレスの裾を押さえながら履き慣れないヒールをならして下に
おりていった

「おい、皆集合」

ギルベルトさんが顔に縦縞を付属させて私達を手招きました

「菊、すまん語り部モード一時停止だ。…」の物語の存続に関わる
大問題が起きた

事の重大さに私達はぐくつと睡をのみました

会場の皆様すいません、
少し語り部モードを休憩です

「語り部モードをしました」

「どうしたってゆーのよ」

「Hリザベータさん…首に抱き着かないで下さい。胸が
「なに照れてんの。菊かあわいいつ。むぎゅー」

ベリつ

「ギルのばかあ、なんで剥がすのよ」

「ありがとうございますギルベルトさん(ちつ)」

「俺様、舌打ちは聞かなかつたことにするぜ(泣)だから聞けつて
ば。重大なことなんだ」

「なん「なのよ」「ですか」「これを見てくれ

「ズボンね。」

「ワイシャツですか。」

「ああ。それから上着と…残念な」と下着なんだ

「…」

「…」

「…ぶはつ」

「Hリザベータさんは大問題ですよ…笑つての場合では

「あははははひい～お腹いたいお腹いたい」

「自重してくださいよ…」

「ははははは、ふう…ふうー。やーいえばもともと日本だとどうな
つてたんだっけ」

「盗まれるのはズボンだけつてことになつてたはずだぜ」
「では、彼は今…」

「ああ…」

「まつぱに靴下ネクタイつてことじやないのー…」

「Hリザベータさんつ…」

「あやははははマヌケよ。えろマヌケだわつ」

「自重しろ」リザあああああ

- - - - - 10分後

「…せつと落ち着きましたね」

「「ふう

「苦労しますねギルベルトさんも」

「あ、たぐたな」

「あ?
あ
あ
菊がそーゆーなの?」

「顔が赤いですよ」

〔二〕

「ここあつたんだ、マイだな、あいつ」

不憚なキ川へ川トさり

（一人で遠い目で満月を見上げる。一人の目には満月に彼が微笑んでみえている。靴下ネクタイまっぱで。）

「さ、まあ今はとりあえず忘れて物語を続けるしかねえな。真相を
知るには」

では語り部モード再開しますのではじめお待ちを

帰つてきました、私、菊です

「むじゅ～…」

エリザベータさんは今も私に寄り掛かつたままで爆睡しています。酒臭ささえも美女にはプラスにしかなりません、ええ。

「ジーするか」

ギルベルトさんはわざわざよろよろとじてこまわ

はで、ジーしたのでじゅつ

「起きしましょうか」

「いやつー・ダメだつー・」

?

私がギルベルトさんを見ると頬をかきながら、”いや～よく寝てる
じゃん、こいつ。起きるのも可哀相だなあつて…”

…ははーん

「そうですね、私では少し力不足ですし。ギルベルトさんよろしく
れば運んでさしあげて頂けませんか」

ギルベルトさんは犬だつたらじつぽがちぎれるのを心配するほど輝
いた顔をしました

「しょーしょーがねーなあ。重いから嫌なんだけどよ。ま、仕方ないよな俺様優しいしなー！」

「いはい、バレバレですよ

私はじじいが孫をみまもる田で嬉しそうにエリザベータさんを背負うギルベルトさんをみていました

「ああ、ここの塀をこえるぜ」

「塀を…？ギルベルトさん。あなたって人は食い逃げしただけでは飽きたらず不法侵入まで」

「ちげーよ」

ギルベルトさんはさすが鍛えているようで一人背負っていても軽々とこぼはある塀を片手でのぼり、私に手を貸してくれた

私が塀の上に着くとそこには料亭の庭のような場所がありました

「綺麗な庭ですね」

「まあな。俺様達はここで次の酒を頂く予定になつてゐる」

私が庭にある古風な雪洞や池に見取れでいると、うーんと呟くような声がした

「…はく」

「エリザ

「あら？ ねーあら、あらひじょ。ねーねー」

「な、なんだよ」

ギルベルトさんに責められたまま、寝起きの甘い声で名前を連呼するリザベータさん

……いいなあとか思つてませんよ

でもやつぱつリザベル萌え。笑

「おねがいがあるの～」

「は？ お願い？」

お酒がぱつぱり残つてゐるリザベータさんは舌足らずな口調でお願いをのぞむ

ちよつと、純愛モードですかつ

”キスして”とか言つちゃいますか？！わー見ていいんぢょ
うか、私はつ…

「あの下着、もひつていい？」

痛いほどの中黙。

エリザベータさん、良い子はオネムの時間ですね。

しゅぱつ

「うつ……」

私の手刀がエリザベータさんの首筋にめり込みました

「…すまない、菊」

「ギルベルトさん。貴方は悪くありませんとも、ええ」

二人は曖昧に苦笑いし、揃つてため息をついたのでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6391k/>

世界は愚かし正せよ祖国!!

2010年11月3日16時17分発行